

## 留年傾向からみたニート予備軍防止対策に関する基礎的研究

高知工科大学 正会員 吉良 有可  
高知工科大学 フェロー会員 草柳 俊二

## 1. 研究背景

近年、フリーターやニート(NEET: Not in Education, Employment or Training)の増加、若年者の離職率増加等、若年層における就職問題が社会問題として大きく取り上げられている。ニートとは、就業、学業にも職業訓練にも就いていない、または就こうとしない人のことを指す。就業・学業の意識もないまま、大学を中退する学生はニートとなりうると思われる。特に現在留年している学生は最も危険が大きい。その理由として、留年期間を経て退学する学生が多いこと、また、彼らは卒業要件である単位取得を重視するため、学業意識は高いが、就業意識は低くなっていることが挙げられる。本研究では、大学生活における学習意欲・就職意思が低い学生(特に留年生)を“ニート予備軍”とし、留年の事前防止、または留年確定後の事後対策の検討を目的とする。

## 2. 留年生と退学者の発生の現状

留年とは、進級あるいは卒業に至らず、同じ学年にとどまることをいう。各大学で進級システムが異なるため、大学毎に留年の定義付けをする必要がある。高知工科大学では、4年次までは全員進級できるため、卒業に至らない学生を“過年度生”と呼称している。本研究において、高知工科大学の場合は、現在過年度生である、もしくは過年度生となることを“留年”と定義する。

## 3. 留年のメカニズム

留年要因の分類を表1に示す。本研究では、学生の留年傾向を把握するため、本学における過年度生を対象に「留年要因・不登校理由」についてアンケート調査を実施した(時期2005.3-4月 配布数15枚(回収率100%))。以下、結果を示す。

## 1) 過年度生となった要因

一般に、留年は単位不足、あるいは休学に起因すると考えられる。アンケート結果では、休学よりも単位不足のため過年度生となった学生の方が多かった。

## 2) 不登校(大学に来なくなった・講義に出なくなった)理由

対人関係に対する嫌気、ストレス・精神不安による病気、スチューデントアパシー、学習意欲の減退・喪失等の回答が多い。特に単位不足による過年度生は、講義内容の理解困難、勉学意欲の喪失、再履修可能科目が少なく履修できない、趣味・遊びの優先等の理由が挙げられており、“講義”への不満が最も多くなっている。

## 3) 大学(講義, 教員等)に対する不満点

再履修不可科目があることに対する不満が80%、足切りに対する不満が47%であった。しかし、その他の不満点については20%に満たない程度である。

以上のアンケート結果より、留年には2段階あると分析できる。第1段階は、ある理由により、不登校・講義欠席となり、ヒキコモリや趣味・娯楽等の学外活動を優先し、単位不足による留年であり、第2段階は、留年後のスパイラルダウンによる再度留年・退学(留年による、再履修科目制限等により受講不可となり、学習意欲が低下し、再度留年または退学に至る)である。

表1 留年要因の分類

分類	具体的理由
1. 身体疾患群	病気, ケガによる養生
2. 精神障害群	ストレス, 精神不安による病気
	対人関係に対する嫌気(人間不信, ヒキコモリ等)
3. 消極的理由群	スチューデントアパシー(大学に対する興味の減退・喪失)
	学習意欲の減退・喪失(講義・担当教員に対する不満)
	単位不足
	学外団体活動
	趣味・娯楽, アルバイトの優先
4. 積極的理由群	進路再考・変更・就職
	性行不良
	海外留学・研修等
5. 環境要因群	他大学再受験
	資格取得準備
	経済的理由
	家庭の都合・父母の看護
	結婚・出産・育児
	人間関係・交友関係

「大学における休・退学, 留年学生について」<sup>1)</sup>を基に作成

#### 4. 高知工科大学における講義の現状

本学は、全科目選択制であり、必修科目は設けていない。そのため、学生は早期に就業・学業に対する目的・目標を持ち、自分の進路（就職、研究）に合った講義を履修するよう計画しなければならない。また、全科目選択制ということで、学生は「いつでも再履修が可能である」という考えを持っている。しかし、実際は過年度生となると、開講対象学年以外の人数制限による足切り、教員判断による再履修不可規制、再履修可能科目の時間割重複等により、再履修に関して制限を受けることになる。そのため、一度過年度生となると履修計画の練り直しが困難となってくる。

#### 5. 留年傾向による学生分類

3章のアンケートから、入学以前の目的別による不登校理由をさらに細かく分析した。就職あるいは学内活動（研究等）に対する目的を持っていた場合、スチューデントアパシーや対人関係に対する嫌気が主な原因となっていた。一方、学外活動（部活等）に対する目的を持っていた、あるいは特に意識していない学生の場合、スチューデントアパシー、学習意欲の減退、講義内容の理解困難、趣味・娯楽の優先等が主な原因であった。

以上を考慮し、留年もしくは留年傾向のある学生を、入学以前、在学中における目的の有無別に区分する（表2参照）。入学以前に目的があった学生を意欲喪失型、目的がなかった学生を目的探求型とする。

意欲喪失型学生は、入学以前に目的を持っていたが、何らかの理由によりその目的を見失い、学習意欲が喪失する（スチューデントアパシー）傾向がある。意欲喪失の度合いが激しくなると、留年や退学の可能性がある。逆に、入学当初の目的を維持することができれば、留年・退学の恐れはないと考えられる。一方、目的探求型学生は、入学以前に目的が希薄であり、大学生活を通して将来に対する目的を見出そうとする傾向がある。目的を見出されないままズルズルと大学生活を送り趣味や学外活動へ逃避する、もしくは学業意識が希薄であるために単位不足となりやすいため、留年や退学の可能性がある。また、就業意識が希薄なまま卒業した場合、定職に就かずフリーターやニートになりうる、あるいは早期離職の可能性も否定できない。目的意識が希薄であると問題視されている学生の多くはこれに当てはまると考えられる。また、2007年以降の全入時代の学生の多くは目的探求型である可能性が非常に大きい。

#### 6. “ニート予備軍”（留年）防止対策

留年を防止するためには、留年となる前の事前対策と留年後の事後対策が必要である。事前対策では、スチューデントアパシーにならないために学生自ら目的を発見・維持するシステム構築、講義内容の理解を容易にする講義改善等が考えられる。学生の自発的な目的発見方法の1つとして、履修計画書、自己能力発見シート等を含む新学生指導システム（自己マネジメントシステム）が挙げられる<sup>2)</sup>。また事後対策として、再履修科目に関する単位取得制限やカリキュラム等を見直し、体系的なカリキュラムの編成が必要であると考えられる。

#### 7. まとめと今後の課題

ニートは就業・学業に対する意識が希薄である。そのため、大学生活における目的意識が希薄である留年生はニートになりえる“ニート予備軍”と言える。“ニート予備軍”の防止策として、自己マネジメントシステム、講義・カリキュラム等の改善が挙げられる。自己マネジメントシステム構築やカリキュラム編成には、4年間の大学生活を体系的に捉え、それを構成する学生指導法（就職指導含む）、講義内容、単位取得制度等についても検討する必要がある、今後の課題となっている。

##### 【参考文献】

- 1) 内田千代子，“大学における休・退学，留年学生について”，『大学と学生』2003年2月号第460号，文部科学省
- 2) 沖野和希，草柳俊二，“大学生のための自己マネジメントシステムに関する研究”，高知工科大学・卒業論文

表2 留年傾向別の学生分類

		入学以前における入学目的の有無	
		あり [意欲喪失型]	なし [目的探求型]
在 学 中 に お け る	あ り	就職	60年代型タイプ 目的発見タイプ
		学内活動 <卒業>	卒業志向 (妥協)タイプ 卒業志向 (発見)タイプ
		学外活動	無気力症タイプ 娯楽重視タイプ
	な し	消極的退学タイプ	
	学外目的	積極的退学タイプ <進路変更，就職希望>	